藝術は予が最良の仕事也

泉鏡花作

明治四十二年五月

私は自分だけでは、自分のやつて居る小説を書くといふ事が、人間の最良なる職業だと信じて居る。且つ何よりも樂しい、嬉しい、懷しいものだと思つて居る。けれどもそれと同時に、繪よりも小説が以上の職業だと言ふ事は出來ない。例へば他の哲學とか、醫學とかをやる場合に於ても、又大工なり左官なりをやる場合に於ても、各自その處を得て居れば、それが其人に取つては最上の仕事たるに相違ない。だから自分のやつて居る仕事が一番好い物だと信ずると同時に、また他の人のもさうだと認めてやらなければならぬ。で、その最も樂しく、嬉しく、懷しい仕事だと信ずる上は、自分で自分の思ふやうな仕事をしなければならぬ。他から註文、と言つては少し當らぬかも知れないが、あの人が斯う言つた、この人があゝ言つたと言つて、唯徒らにその言ふ通りになつて居ると、何時の間にか、「自分の最良の仕

事」を離れて、「他人の最良の仕事」になつて仕舞ふ。是れ取りも直さず惚れやうが足りないと言つた譯で、眞實を離れて、他人の意見に迷ふのは極めて情の薄い仕打である。それでは到底自信のある仕事は出來ない。

とは言ふが、然し是は只徒らに他を排斥せよといふのではない。自分ばかり勝手な事をやつて少しも他の意見に耳を借さないのは無論よくない。例へば批評家といふ者がある。その批評家が、うまいにせよ、まづいにせよ、眞心を以て言つて呉れゝば、それが必ず作者にも通ずる。その眞心をさへ領することが出來たら、作者はまづいと言はれても決して怒る理由はない。然し若しその批評が情實にわたつて、嫁に對する小姑のやうな態度でやられたら、何うします。・・・・さういふ他人の言を一々氣にして居た日には唯迷ふばかりで自分の仕事に對しては何の利益もなからうと思ふ。

そこで今度は私の作其物を如何に見るかであるが、私は世道人心を導かうとか、事實を其儘に描かうと

か、或は今の流行語で言へば現代に觸れるとか、さういふやうな態度を以て書くのではない。實は態度と言へば非常にむづかしくなるので、それも思ふやうに行けば好いが、私は寧ろ希望といふ事にして置きたい。で、私の作に對する希望は、花なら花を見、月なら月を見る場合と同じく、それに對し、それを讀む間は、總て他の事を忘れ、一切の雜念を去つて、作物其物の中に人を遊離させたい。そして讀んだ後でも、何か深い印象を殘したい。但し更む場合に於て、それと同時に他の事を引きつけて考へるとか、それを讀みながら他の事を聯想するとか、いふやつな事は勝手で、到底人の心持を一定さすることは出來ない、十三の者と、三十の者と、四十五十の者とは、各々その讀む時と境遇とに依つて如何樣にも違つて來る。だから作物に依つて　宗教的な考へを起させようとか、現代思潮を窺はせようとか、或は社會問題を解決しようとか、さういふ何かの目的を以て書くのではない。唯願くばそれを讀んでから一日なり、二日なり、一箇月なり、或は何年の後なりに於ても、それを思ひ出しては其事を見、其事を聞き、其中にあるやうな心持になつて、矢張讀んだ時のや

うに總ての他の事を忘れ、一切の雜念を離れるといふことにありたい。必ずしも作中の事實が所謂事實でなくても好い。そんなことは少くとも差支へない。

然し私は希望と言つたが、それは決して讀む方の人に對しで相談をかける意味ではない。寧ろ自分に對する要求である。若し向うの人の心を察して書かなければならぬことになると、自分の作りたい物を作るといふよりか、人の作りたい物を作るといふことになつて主客轉倒、そんな樂しい、嬉しい、博しいは力も品もないものだ。で、餘り向うに相談をかけると、下手な役者の舞臺に於ける仕草のやうに、見物に相談をかけて、見物の言ふなり次第にならなければならぬ。それなら敢て役者を待たないまでも、見物の方でいくらも　芝居が出來る譯だ。

で、自分の希望は、飽くまでも自分の作つた物の中に他を引き入れたいといふのである。引き入れて聲を　聞かせるには怒鳴らなくてもよい。低い聲で言つても向うが引き入れられるやつになりたいと思ふ。然し低い聲と言つたが、高い調子や、強い調子

は必要である。唯しめやかに言ふべき場合に大聲をあげたり、しとやかに言ふべき場合に喚いたりするやつなことはしたくない。で、その觸れるといふことに就ても、自然に　自由に觸れるなら差支へはないが、餘り觸れよう／＼とすると、うるさいやうと言はれる。さうだ、うるさいやう、野郎の肌ざはりは氣味が惡いやうと言はれるかも知れぬ。（談）